

歩く県道シンポジウムニューズレター

『交流人口拡大による里山の活性化 ～旧街道で甦る食・文化・歴史～』



交通不能区間となっている旧街道を「歩く県道」として整備・利活用し地域の活性化に繋げるために、平成23年度より地域住民や学生、関係自治体と一緒に「道普請」を実施しています。当初、修繕作業自体が目的だった取り組みが、継続することにより「道普請」を1つの手段として交流の輪を広げる活動へと変化し、地域における活発な活動へと結びついてきました。

これからこの取り組みを、地域の持続的成長や交流人口の拡大に繋がる活動として継続していくために、今後の可能性や課題を確認・共有することを目的として、「歩く県道シンポジウム」を2部構成で開催し、意見交換を行いました。

第1部 歩く県道シンポジウム 平成27年2月15日(日)14時30分～ 東北芸術工科大学にて開催

最初に、銀山街道や東松峠における「歩く県道」を利用した活動発表が行われ、引き続き、東北地域環境研究室代表で内閣官房地域活性化伝道師の志賀秀一氏から、「これからの地域の交流人口について」と題して基調講演をいただきました。

その後、東北芸術工科大学准教授の田賀陽介氏をコーディネーターとし、基調講演者の志賀秀一氏、東北芸術工科大学教授 中山ダイスケ氏、同准教授 渡部桂氏をパネリストとし、旧街道を活かした地域づくりと地域づくりにおけるデザインとの関わりについてパネルディスカッションを行いました。



基調講演

「これからの地域の交流人口について」 講師 志賀秀一氏

「歩く県道」をはじめとした地域資源を、観光という視点からどのように利活用し、交流人口の拡大に結び付けていくかについてお話しをいただきました。



「観光」という言葉には、「光を観る」あるいは、「光を示す」という意味があり、この場合の「光」＝「地域の宝」。つまり、観光とは、自分達の地域にあるものを、地域の人達で共通理解を深め、自信をもって外部の人に示すこと。

地域活性化のために、交流人口(観光客)を増やすことは有効な手段の1つ。地元の人々が地域資源をしっかりと認識し、常に魅力作りや再発見を行うという姿勢が大切である。峠道についても、その歴史を振り返り、「今後どのように活用していくか、そのために必要な取り組みは何か」について明確にする必要がある。

また、訪れた人への声のかけ方も重要で、地域を訪れる人に、どういう言葉で接し、どのようなおもてなしをしていくのかという、受け入れ体制を整えることも必要である。

地域を次世代へ繋いでいくために、今ある地域資源を徹底的に活かした取り組みをパワーアップさせる事が大切とのお話がありました。

パネルディスカッション

コーディネーター: 田賀陽介氏
パネリスト: 志賀秀一氏、中山ダイスケ氏、
渡部桂氏

「地域をデザインする」をテーマに、旧街道を活かした地域づくりと、地域づくりにおけるデザインとの関わりについて意見交換を行いました。

- 自分の知らない土地に行き、道を自分で造って歩くという取り組みに可能性を感じる。(渡部)
- 「美女峠」というネーミングに興味を示す人は多い。今この場に居る人達で共有し始めているネーミングを活かした取り組みの面白さを、もっと広く共有できるようにすべき。(田賀)
- 他の地域の人に歩いてもらうには、ガイドブックや地図は必要。峠道に、その地域にある木材や季節のものを活かしたサインがあると良い。看板をいろいろな人達で手作りするのも楽しい。(中山)
- 観光の動機として「体験」という言葉がたくさん出てくる。「道普請」を体験したい人もいるはず。峠を上手に利用する発想が大切。(志賀)
- 漠然としているものを視覚化するのがデザインの仕事。地域の人が思っている意味を伝えること



は可能。道を廻ること自体をブームにして他の地域と連携すると良い。(中山)

参加者の意見・感想

- 峠道を歩き地域の歴史を見直してみることで、守ったり補修したりすることの意味を再認識することが大切だと思った。
- 街道の歴史を掘り下げ、より深い部分での魅力を活かした取り組みを行って行きたい。
- 道普請を通して様々な人と出会い、心を通わせることが出来たが、今後地域とどう関わっていくかという課題も与えられた。



第2部歩く県道シンポジウムを開催し、「歩く県道」を活かした地域づくりに
ついて意見交換を行い、今後の課題等について確認しました。

初めに大内宿結いの会顧問の吉村徳男氏より、「大内宿で大事にしていること」
と題し基調講演をいただきました。

引き続き、「歩く県道」の取り組みについての成果報告が行われ、その後、東
北芸術工科大学准教授田賀陽介氏をコーディネーターとし、「歩く県道からはじ
まる里山の活性化」をテーマとしてパネルディスカッションを行いました。

基調講演をいただいた吉村徳男氏、銀山街道を活用して地域を元気にする会会長の角田伊一氏、東松峠を護る
会会長の鈴木衛氏、食文化研究家の平出美穂子氏、会津若松建設事務所企画調査課の三瓶融係長がパネリストと
なり、「歩く県道」の取り組みに対する思いや、旧街道沿線地域の連携の必要性等について話し合いました。



基調講演

「大内宿で大事にしていること」 講師 吉村徳男氏

大内宿で地域づくりを行うにあたり大
切にしてきたことを、年中行事やイベン
トの取り組みを通してお話しをしてい
ただきました。



「観光」とは観る光と表記されるが、
大内宿で暮らす人達は「光」を衣食住の文化ととら
え、昔から続いている年中行事や文化を大切に
して日々の生活を送っている。地域を作っていく
上で一番大切なことは、地域のコミュニティーを
しっかりさせること。無くなった年中行事を復
活させることでそれを強くした。「若水汲み」や
「しめ縄作り」、「団子挿し」、「賽の神」、
「お宮参り」など、1つ1つの行事を大切に
することが地域を作っていくための力になり、
観光に繋がっている。

「雪まつり」を実施するのは今年で29回目。
おもてなしの心を持ちつつ、地域の人達自ら
が楽しんでいることが、取り組みの継続に
繋がっている。

大内宿では、祭りを通し世代間を超えて、
地域の人達みんなが地域の方向性について
話し合う機会を多くもっている。子供達は
小さいころからお祭り等の行事に参加する
ことで、地域の一員であるという認識を
深め、地域における自分の役割を知りな
がら成長する。大人も、その時々で果た
すべき役割を認識し、地域の行事や文化
の継承に努めている。茅葺屋根の葺き
方は、文字で教え、映像を見せ、実習場
を作ることで、次世代への継承に努め
ている。

何事にも情熱を持って取り組むことが
大切であるとのお話しを伺いました。

パネルディスカッション

コーディネーター：田賀陽介氏
パネリスト：吉村徳男氏、角田伊一氏、
鈴木衛氏、平出美穂子氏、三瓶融氏

「歩く県道からはじまる里山の活性化」を
テーマに意見交換を行いました。主な意
見をご紹介します。

- 銀山街道は大部分が当時の状態で残っている。
歩くことで江戸時代の気分が味わえる。文化財も
多くあり、歴史街道として残していきたい。マッ
プやガイドブックも作成したい。(角田)
- 新道や洞門は地域の人達の手で造った道。洞門
を開通させたい。当時の姿を残しながら、歴史や
自然と触れ合える道にしたい。(鈴木)
- そば切りは「歩く県道」で繋がる地域の人達の
日常にあり、自然におもてなしができる料理の1
つ。江戸でソバが普及する30年以上前から巡検使
料理として提供されていた。(平出)
- 大内宿～銀山街道～東松峠のような大きな枠
組みにおける連携も考える必要がある。(田賀)
- 地域同志が連携することで経済が活発になり、
地域に残る人が増える。高齢化が進んだ地区にお
いても、年配者が役割や大きな目標を持つことが
大切。(吉村)
- 洞門の開通や銀山街道のパーマネントコース
化など、地域の人達の夢の実現がテーマ。(三瓶)
- 子ども達の学習の場として利用するためにも、
駐車場、トイレ、休憩施設等の整備が必要。(平出)



多くの観光客が訪れる大内宿



美女峠のブナ林



東松峠で行われた官民協働の道普請

ご意見・お問い合わせは



福島県会津若松建設事務所 企画調査課
TEL 0242-29-5455

FAX 0242-29-5459